

佳作

未来へひなぐおはやし之音

茨城県 高萩市立松岡小学校五年 大森 叶絢

「もう、春日町のおはやしはなくなるかもしれない。」

お父さんがつぶやいた一言。私が住む高萩市にはとても大好きな伝統行事があります。それは、毎年夏にするお祭りです。このお祭りでは、各町内、さまざままで色あざやかな山車を引いて、たいこや笛の音でえんぶをします。町中を一せいにパレードで回ります。子どもからお年寄りまで、みんなが笑顔になります。私は三歳のころから参加していました。

少子化が進み、私達の町内は子ども会の活動が終わってしまいました。お祭りの山車を引く係やたいこをたたき係はいつも子どもが中心でした。子ども会がなくなって「おはやし保存会」を立ち上げ、町外の人にも声をかけてこの二年間は参加しました。しかし、今年はなかなか人が集まりませんでした。お父さんは、さびしそうな顔で私たち姉妹に言いま

した。

「今年の山車は、お前たち姉妹が参加しないと、動かすことができないんだ。」

その言葉を聞いて私は悩みました。実はお祭りの日は、バスケットボールの大事な試合がありました。チームの仲間で一先けん命練習してきた大事な試合です。私は、試合に出たい気持ちと、お祭りをなくしたくない気持ちの間で、とてもなやみました。

お祭りの日がやってきました。空は雲一つないすっきりと晴れた天気です。私は、試合に行くのをあきらめて、お祭りに参加しました。今年のメンバーはなんとかぎりぎりの人数です。みんなで力を合わせればきっとできる。そう信じて、山車の演ぶに全力を注ぎました。たいこをたたき笛をふきながら市内を回っていると、たくさん人たちが道に出ていて、手をふってくれました。あるおばあさんは、

「今年もやってくれてありがとう。楽しみにしていたんだよ。」

とやさしく声をかけてくれました。その言葉を聞いて私は胸がいっぱいになりました。

町内に戻ってくると、たくさんのお客さんが私達の演ぶを待っていました。大きな音でたいこをたた

くと、お客さんは足をとめてじっと見てくれます。力いっぱい演ぶすると大きな拍手がびびきます。朝からたいこをたたきっぱなしで、やり終えたときは体がぐたくたでした。でも、そんな疲れもふきとんでしまうくらい、大きな達成感で胸がいっぱいになりました。

家に帰ると、お父さんが言いました。

「今年も参加できてよかったね。」

と。私も同じ気持ちになりました。私はこのお祭りを通して、伝統を守ることの大切さを知りました。そして、この感動をたくさんの人に伝えたいと思いました。来年も再来年も、ずっとこの町におはやしの音がびびき続けるように、私はこれからもお祭りに参加したいです。